

---

# 雨音のワルツ

五十嵐 ライカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨音のワルツ

### 【著者名】

NZノード

### 【作者名】

五十嵐 ライカ

### 【あらすじ】

初めて君の声を聞いたのは、雨が降り続く放課後でした……

()

田代二つ子

君の存在は、ずっと前から知っていた。

けれど……君は進んで前に出るタイプではないから、にぎやかな友人に搔き消され、言い方は悪いがモブのようになつていたんだ。

君のいるグループと僕らのグループは、わりと仲が良く、一緒に遊んだりすることは多かつた。

だけど……君と話す機会はずつとなかつた。

ある雨の日の、放課後までは。

君は、雨が降り続くのをずっと学校の玄関から眺めていたみたいだ。少し制服が濡れているのが、そのことを物語っている。

周囲には、いつもいる友人達の姿はなく、君は一人でいた。

「ねえ、帰らないの？」

僕はいつの間にか声をかけていた。

驚いた様子で振り返る君の瞳は、少し赤く潤んでいた。

……それで僕は全てを悟った。

君はずっと、無理をしていたんだって。

それを気づけなかつた僕は、なんだか悔しくて仕方なかつた。

そつと傍に行き、傘をさした手とは逆の手で、君の細い手首を軽くひき、一人で傘に入り無言のまま歩く。

あえて君の顔は見なかつた。

……君の肩が震えていたから。

学校の最寄り駅までの道を歩き、改札にたどり着いた。傘を閉じ、君の手首を少し残念しく思いつつ離す。まだ君の肩は震えたままだった。

「……ありがとう。」

少しうわすつてはいるが、穏やかな君の声を僕は初めて聞いた。思わず君の顔を見ると、涙の跡は残っているものの、声と同じく穏やかで優しげな微笑みを浮かべていた。

僕の胸が高鳴り、見惚れてしまう。

君は少し戸惑い、困った表情をしたが、その表情にさえ惹かれてしまった。

また手をとり、

「送つてくよ。」

なんて身勝手なことを言っていた。

君は嬉しそうに頷き、僕の手を握りかえした。

君を家に送る間、涙の理由は聞かずに、色々な話をした。

こうこう変わる君の表情、時々聞こえる笑い声、未だ降り続く雨音も、僕の耳に優しく響く。

こつちつてずっと一緒に居られたらな、なんて思つてしまひませぢ、

君に惹かれていた。

でも今は焦らす、君の声と雨の音の中、君のこの手を握つてこよう、  
そつ思つた。

雨音のワルツ  
(いつか君と二人で踊れたら、なんて)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0907v/>

---

雨音のワルツ

2011年10月9日12時02分発行